

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第十六回 世界の紛争と宗教

南出喜久治 (令和7年4月15日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

世界の紛争の深層の多くには宗教対立があり、それが食料・エネルギーの争奪や土地の争奪として表出して紛争が起こってきました。民族紛争の背景にも、根底には宗教対立があります。

そのため、宗教間の相克と対立を克服するために、宗教を持ち出して解決を図ることはできません。解決策を宗教の教義等から導かうとするのは自家撞着です。

紛争解決のためには、究極的には宗教を捨てて、世界が祭祀に回帰してその復興を実現しない限り、世界の絶対平和は実現しません。God が全知全能の絶対神であれば、紛争を起こす人類を誕生させないはずであり、仏が衆生済度を悟つたのであれば既に人類は救済されたはずです。その意味では God には全知全能が備はつてをらず、仏は悟つてゐないこととなります。

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす。

これが厳粛な事実であることに目を背けてはならないのです。

そして、結論的に申せば、いはひまつりの道 (祭祀の道) は、哺乳類である人類が人類として永遠 (とことは) に生存し続けるためには守り続けなければならないものであり、これを守らなければ人類の未来は滅びに向かふこととなります。

宗教は個人主義です。信心を持つ者だけを救ふとするものだからです。

宗教は、人間が観念によつて生み出した神仏を絶対と崇めて、人間がその神仏によつて作られたのでそれに絶対服従するといふ循環論法の典型によつて作られたものです。人が作つたものによつて人が作られるといふのは完全な循環論法なのです。

そして、信仰しない者は神仏の怒りを受けて救はれない (地獄に落ちる) とします。信心を持つ自分だけが救はれるのであり、自分の親兄弟、妻子は救はれません。だから個人

主義なのです。

さらに、信心といふ観念だけでなく特別な行為が求められ、それを行はない者にも神仏の怒りを受けて救はれない（地獄に落ちる）のです。信心は恐怖の裏返しとして成立します。

また、特別な行為といふのは、信仰を表明する様々な行為であり、特に教団に対しては喜捨といふ寄付を求められます。

宗教にのめり込んで緊張をし続けるのではなく、もつと心休まる道があるのです。道は近きにあり、然るにこれを遠きに求むるが如く、宗教を求める必要はありません。心を豊かにして生活を安定させる道がすぐそばにあるのです。それが祭祀です。

祭祀を実践しても何ら経済的な利益や効果を齎すことはありません。祭祀は、現世利益を求めるためのものではないからです。感謝する者が利益を求めるのは筋違ひです。だからこそ祭祀を実践すること自体に尊い意義があります。それが祭祀の本質です。

これに対して、経済的な利益を考へて人々を理性（計算）で誤導するのが宗教です。喜捨とか寄付といふ言葉は、経済用語です。見知らぬものからの御利益の見返りを期待することなのです。しかし、祭祀の奉納は、神人共食のためのもので、ともに分かち合ふことなのです。